

〈研究ノート〉

ノルウェーの社会科、宗教・道徳教育及び生活指導

—2005年9月の見聞・第3報—

北川 邦一

Social Studies, Religion / Ethics Education and Student Guidance in Norway (3)

KITAGAWA Kunikazu

(一) ニッテダル中学校 *Nittedal ungdomsskole*

9月8日午後、ニッテダル中学校を訪問した。校長 *Rektor* は、*Anne-Lise Hetland*。

同校は、2005/2006学年度の第8、9学年各3学級、第10学年4学級の生徒数小計283名、および *Oasen* (=英 *oasis*) という障害児学級の生徒10名。

職員は、校長1名、一般教員33(副校長 *Inspektør* 1を含む)、特別教育教員3名、教員資格を有さない常勤のアシスタント4名、環境セラピスト *Miljøterapeut* 1名、音楽療法士 *Musikterapeut* 1名、事務長 *Sekretær* 1名。

ニッテダル・コムーネ *Nittedal kommune* は、2005年1月1日現在人口19,578人で面積186(km)²、内129(km)²が平野部 *marka-områder*、43(km)²が土地利用地域 *landbruksområder* である。Oslo 中心から国鉄 *Norges Statsbaner* で30分くらいの位置にある(注1)。

(1) KRL 科授業「選択と価値」

「キリスト教、宗教及び人生観(についての知識)科」*faget kristendoms-, religions- og livssynskunnskap* (略称 *KRL*) の中学1年生(第8学年)を対象とする12:00-12:25時限の授業を途中から20分程見学した。テーマは「選択と価値」。「選択」を巡る授業詳細は省略。

具体例を挙げての授業

○映像を見せて。「この町はどんな町?」、「貧しい?」、「自由の象徴」。

○「お金を拾ったらどうする?」。

・誰も見ていなければ自分のものにする?」

- ・届け出る？
 - ・〇〇%もらう権利がある。
- 」 本当はする必要のないことを
したら後悔しないだろうか？

概念的知識の教授

- 「法律」*Lover* とは何か。(注2)
 - ・法律とは何なの？
 - ・法律の例を挙げよう。
 - ・法律は、政府、首相、内閣、国会等のいずれが定めているか？
ノルウェーでは国会が法律を定める。
 - ・法律は書かれたもの。法律に従わないと罰を受ける。禁止を破ると罰を受ける。

- 「規則」*Regeler* と法律 *lover* の区別
 - ・クラスのルール *regeler* は法律か。
 - ・*regeler* も文書で書かれたものである。
 - ・家族でも学校でもルールがある。
 - ・このクラスのルールはみんなが作ったか？→否。
教師が決めたけれども、プロセスに生徒は参加した。

- 「規範」*Normer* (≒英 *norm*) とは。
 - ・テーブルに載ってはいけない。
 - ・誰でも知っているから文書にしない。
 - ・例。ある国では皿に出されたものは全部食べなければならない。
日曜日の堅信礼への出席。
プレゼントをあげる。その外。
 - ・規範に反した行動は他者からの反応(反対行動)を受ける。

- 「価値」*Verdier* (≒英 *values*) とは何か。
 - ・文化の基本として存在している。
 - ・法律やきまり、規範の基本となっている。

途中、別の教員(学級担任?)が来室し、①既往の遠足に関するレポートを収集。3、4人が不提出。②学校に泥棒が入った、退出時には必ず窓、扉の鍵を掛けるよう、学年委員会の委員は気を付けるよう注意した。その後、社会科教師は翌日までに教科書の16頁迄を読んでおくことを宿題とした。

[以上、例を挙げながらの、行為規範に関する概念的知識の教授が印象的であった。]

(2) 社会科「歴史における技術の発達」—飛行機から月面着陸まで。

3年次生を対象とする「社会科」の標記の主題—副題の授業を約20分見学した。

12:35~13:25の授業で出席生徒20人。3人が欠席の様子。教科書は *Erik Lund, Eivind*

Indresøvede 共著、*Innblikk Historie 10*、Aschenhoug 社、2004/05年。

授業は、教師の発言→生徒の発言→教師→生徒、と進行。予め宿題として教科書等を学習しておくことが課せられているようで、授業の進行は早い。

授業・応答・会話内容（抄）

- (L) ラジオは何時出来たか。(以下、教員 lærer の発言は (L)、生徒 elev の発言は (E) で表す。)
- (L) 外国のラジオを聞いたことはあるか。
- (L) あと2、30年でデジタル・ラジオになる。デジタル・ラジオとは？
- (L) シグナルが電波でなくデジタルになる。
- (E) AVS システムがあって、その中で一番質の良いシグナルを探している。
- (L) 戦争でどのような技術が進むのか。
- (L) アインシュタインは…。原子爆弾がどれほど都市を破壊するか。
- (E) 広島、長崎の例。
- (E) チェルノブイリでも原発事故があった。
- (L) 米ソの核競争はどういう結果を招いたか。ソ連の社会主義が終わった時、どういう経済状態になったか。
- (E) 財産格差が拡大した。
- (L) 経済破壊の跡、安全面でもひどい例が見られる。
- (E) ソビエトでは技術管理が維持されなかったが、どういう問題点があったのか。
- (E) ロシアは貧富の差が大きいですが、地下鉄はすごく良い。どうしてそんなところに金を使っているのか。
- (L) コミュニケーション・サテライトができたのは何時？
- (E) 1962年です。教科書にサテライトサービスの表があるが、1980年から1990年に掛けて値段が下がっているのはなぜか。
- (L) グローバルな競争が生じたせいもある。
- (L) グローバルな経済協力についての勉強が宿題です。明日までの宿題は22-25頁。
(授業後の説明では、教師は毎月、評価レポートを親に送るという。)
- (L) あと10分残っているので宿題部分を読みましょう。

(教科書を忘れた生徒は教師のを借りた。トイレに行く生徒が1人。)

授業進行は非常に速く思われ。教師が教科書から課題を与え生徒が予習。授業では教師が授業内容カードを用意し「クイズ方式」で発問。それに対する生徒の反応・回答に応じて教師が基本説明や補足説明をしていた。生徒の発言、教師生徒間の応酬が活発であった。

(3) 社会変化と子ども——同校副校長の見解

下記は、同校教育担当インスペクター *undervisningsinspektør* のアリルド・トルステンセン *Arild Torstensen* 氏からの「近年の社会変化と子どもの現状」に関する聞き取りである。

なお、*inspektør* (注3) は副校長、教頭または主任に該当する職種であるが、下記からも判るように、同校の場合、副校長は実際に教員の授業等の視察(≒英 inspect)も行っている。

生徒が喧しい

授業中、生徒が静かに座れない。喧しい。

どのように良い学習環境を作るか。どういう校則を作るか。どのように学校で望ましいリーダーシップを作りうるか。教師と生徒とのコミュニケーションを作りうるか、2003年春から議論が続いている。毎日の出来事をひとつ一つ表にして何を改善できるか、何を規則にするか追究している。1. 授業前にどうする、2. 黒板で教師が教える、3. 生徒がプロジェクトの勉強をする、等にわたって、どういう状況が望ましいか。視察に入ったその時、どういうタイプの学習をしているか、学習方法を明確にするように求めている。

例えば2人1組の学習の組みの作り方は、以前はよく生徒が決めていたが、現在は多くの場合、教師が決めている。

「交渉する世代」*Forhandlingsgenerasjonen*

今は、生徒の教室移動が多いので、その移動のルールを決めることが必要になっている。

生徒は近年、次第に喧しくなっている。なぜか。子どもには選択肢、選択の自由が多くなってきている。子どもは家で忙しくなっている。

子どもは家で親と交渉し合う場合が多くなってきている。「交渉する世代」*Forhandlings-generasjonen* (≒ generation of negotiation) と言われている。交渉の文化になってきた。ここ10~15年くらいのことだ。家では親と子だけであるが学校では1学級に30人もいる。

Eidsvåg 教授によると、喧しさは、ギリシャとノルウェーがひどい。

ノルウェーでは、生徒は学校が好きだ。

[北川：なぜ「交渉世代」か。親が寛容か。時間が出来たのか。豊かになって子どもの要求を満たせるようになったからか?]

親の自由時間は少なくなっている。子どもの要求を親は認める。子どもの要求を親が認めやすくなった。

子どもが晩くまで戸外に

市街部では夜遅くまで子どもが戸外にいる。親の自由時間が出来るからかもしれない。警察は「親は何処にいるのか」と問題にしている。

コマーシャルの影響

子どもは市場のプレッシャーを経験している。小さい子どもまでが大人のまね、特に女

子が年上の女性のまねをしている。

携帯電話

以前は持参禁止にしたけれどそれはやっぱり無理だった。offにしてバッグに入れさせている。休み時間には生徒は携帯電話で話している。小学生でも殆ど持っている。おそらくノルウェーは携帯普及率が一番大きい国らしい。携帯電話特有の言葉が発達している。

ニッテダルの地域的特徴

農業地域及び企業地域でもあるが Oslo 市内・近郊ではここが一番豊かな地域である。外国人の多くは Oslo 中心地の東側に居住している。外国人が80%、90%の学校もある。

労働市場における職人不足・職業教育実習の場の不足

今は大工は足りない。手工 handicraft 分野の職の需給は市場によって動くだろう。最近では職業教育実習をする場が足りない。

数学、自然科学人材の需要

中学校では、数学、自然科学の教員を採用する場合、人材選択の融通性は殆ど無く、高等学校では少ない。科学を専攻した人が、学校教員では賃金が少ないので教職を選ばない。

企業でも数学・自然科学の専門家が少ない。政府が専門家育成のキャンペーン、特に女性専門家育成のキャンペーンをしている。

(二) ホルダランド県 *Hordaland Fylkeskommune* における高校教育

2005年9月12日(月曜) 9-11時、同県庁を訪問し、主として国際課行政担当部の *Svein Schröder Amundsen* 氏から県の政治行政全般と高校教育の特徴について聞き取った(注4)。

(1) 県立高校等

①県は46の高等学校を保有しており、県としての保有校数は国内では1、2番に多い。ノルウェーの県の教育権限は後期中等教育(高等学校及びそれと連携した職業教育実習)が主である。県職員4,160人中、教育関係職員は2,887人である。県立高校生は約1万7,000人、職業実習見習い生は約3,000人であり、約1,500人の教員がいる。県はこの他に社会的医学的な事由の生徒のための基礎学校・高等学校兼民衆高等学校 *folkehøgskole* 1校を保有している(注5)。高校生の約1万人は *Bergen* にいる。生徒数1,400人で学問的コースと職業的コースを備える大規模校も、1、2の職業コースで100人以下の小規模校もある。

②県では教育に関して、戦略目的を定めて2005年から新改革を試行している。

第1の戦略目的は、学校では国の政策 *Kultur for læring* に沿って教育を行うことである。

第2の戦略目的は、高校でのリーダーシップを開発して行くこと。資格向上について、校長だけでなく *inspektør* も含めてリーダーシップを開発して行くことが課題である。高

校教員に対しては、2005、2006年の2度、資格向上のための9日間のリーダー養成プログラムで研修を行い、それで資格を与える。2004-2005年に全国調査が行われた。県でも共同レポートが出来て、県全体の教育行政および各学校毎の長短の調査が行われ、報告・指摘を受けた。2007年に再び上記リーダーシップ・プログラムの評価プログラムが始まる。

第3の戦略目的は、教育課程の改革である。国は「知識向上」(政策) *Kunskapsløftet* で第1～第13学年の共通教育課程について既に定めた。その著作は、総則 *Generell del*、教育の原則 *Prinsipper for opplæringen*、科目及び時間配分 *Fag-og timefordeling*、科目教科課程 *Læreplaner for fag* で構成されており、新教育課程は第1学年～第10学年及び第13学年＝高校第1学年については2006/07学年度から実施される(注6)。高校は各校が能力開発計画(注7)の責任を負う。各学校が成人の能力再開発も含めた教育組織 *lærende organisasjon* になり、資格向上の責任を負う。教員だけでなく学校指導部も生徒も責任を負う。その際、共通の経験 *felles erfaring*、共通知識 *felleskunnskap* を優先事項 *prioritering* としている。何かの資格に向かって毎日学習 *hverdagslæring* (≡ *everydayslearning*) することが課題である。誰がどのように評価するかが問題であったが、今度はどういう能力を与えるか・育てるかが問題である。

第4の戦略目標は、教育が第1学年から第13学年まで繋がっているようにすることである。高校はドロップ・アウトが多い。コース・科目の間違った選択が行われていたからだと考えられる。これに対して、「将来の選択」 *Framstdsvalg* という新しい科目を設ける。この科目で高校の科目をよく知るようにする。2年間にわたって180時間行い、成績をつける。この科目では、各生徒に高校のすべてのコースの教科課程 *programme* を見せる。少なくとも2つの *programme* を見せる。これは既存の教育方針にはまだ書かれていない。

(2) 私立高校 *friskole*

私立高校(多数は宗教的学校)が増大傾向にあり、12、3校中9校か10校がBergen市内外に在る。私学生徒は約1,500人である。今の政府の下では私学が増えつつある(注8)。最近競争主義の私学が増えつつあり県はこれを抑制している。したがって、一方的増強ではない。職業高校は経費が大きい。これに対して、私立は経費が安くて良い「クリーム」だけをとっている。県では、新しく幾つかの私立学校認可の申請があった。けれども無条件で認可して来ているのではない。例えば、「ソナングス」と「アカデミエ」の2校はもう存在しているが、生徒定員増は認められなかった。また、2006年秋にはベルゲンの中心部に1,000人規模の私立学校「ヨハン・パウエル高校」を作る予定であり認可はされたが、入学申請生徒が半分しか見込めず、少なすぎるので認可を取り下げたので発足していない。

私立高校設置・定員増に関しては県議会が決定するわけではない。今回は県議会が勧告を教育研究省の下の教育管理庁 *Utdanningsdirektoratet* に出してそれを聴き入れてもらった。

以上のようにノルウェーの既存の教育界では私立高校に対して抵抗が大きいようである。

(3) KRL、宗教／倫理教育

学校では宗教教育が大きな問題になっており、「キリスト教、宗教及び人生観科」*faget kristendoms-, religions- og livssynskunnskap* (略称 KRL) が問題の中心になっている。

他の宗教との出会いが増えているが、ノルウェーでは従来異文化に対する経験が少ない。

この問題について、みんなの生徒の共同の時間を作ろうということになっているが、議論は激しい。キリスト教の教育を学校で行ってきたが、異文化から子どもたちに対してはどうするのか。その子たちがノルウェーの伝統に合わせるのか、それともその時間の授業を免除されるのか。KRLの改革は一応決まったが、結果如何はまだ不明である。どこまでが知識で、どこからが宗教教育になるかは、とても難しい。それが難しく、「キリスト教教育押しつけ」に反対する親たちが国連の人権委員会に提訴した(注9)。人権委員会は、宗教教育に関しては親に権利があるとした。具体的には、賛美歌を歌う、教会を訪問する等であり、従来は出席免除の権利・参加拒否できる権利が認められてきた。

ノルウェーでは、学校教育は堅信礼についての教育として始まったという事情がある。従来は国と教会の関係は自然だったが、多様化の中で問題が生じた。つまり、多文化社会になったことと、もう一つ、ノルウェーの価値観が多様化してきたことがある。1969年の判決は、「学校は洗礼教育の責任は有さない」という趣旨のものであった。

学校での賛美歌唱や教会訪問は当然と考える親もいるし、地域差も大きい。ベルゲンでは、堅信礼への参加は低くなっていたけれども、この数年で倍になった。堅信礼教育のプランもあるが。それは地域によって多様である。今は堅信礼は学校の責任ではなくなっている。かつては学校に僧侶が入って堅信礼を行っていた。堅信礼を受ける意味も変わってきている。かつては大人の世界に入る第一歩だった。そして洗礼を受けた人が自分の信仰を確認するという意味があった。今はそれは完全に無くなった。教会がもう一度確認して牧師を通して三位一体の神の祝福を受けるというくらいの意味になっている。

筆者は、1997年に初めてノルウェーを訪問したときには、「民主主義の国での宗教教育」に驚いたが、今回の訪問で、それなりの内的事情が理解でき始めたように思われた。

(4) 教師の役割

過去から現在に大きく変化した。かつては学習の「源」Kilde (= fountain, source) であったが、今は「仲介者」Formidler (= mediator) になった。Gudmund Harnes 教会教育研究大臣(1990年秋～95年12月在職)の目的は、教師の教育者、育成者、模範としての役割を明確にすることだった。これは1990年代までの考え方で、今はそれほど重視されてい

ない。今は学校が知識を重視しており、政治的経済的にも重要な役割を果たしている。この10～15年に傾向が変化し、指導者としての教師の役割は低くなっている。しかし、若者の生活面では指導者を求める面が出てきている。教師の価値伝達者としての役割が生じてきている。価値を伝えることによる生徒の育成は、教師の活動の中でとても重要である。

(三) ヴォス・ギムナス *Voss gymnas*

Vossはホルダランド県の東北部に所在し、内陸交通要衝の経済的に比較的安定した都市である。Bergen→Osloは概ね東に478km、Vossはその途中でBergenから99kmにある。

ヴォス・ギムナスは、2005/2006年度、生徒約400、教職員70である。1916年に国立高校Landsgymnasとして創設された伝統ある学校である。地方からの若者を集めた全国的に第1の学校であった。普通、音楽、体育の3学科 (studieretning ≡ 学習進路) がある (注10)。

以下は9月13日午前に訪問した *Erik Sølberg* 校長 (1989～在職) からの聞き取りである。

(1) 社会変化の傾向と教育、子ども・若者

①従来は、電話、鉄道、石油会社、水力発電、郵便は全部政府の事業だったが、これらは部分的に民営化され、*statlige aksjeselskap* (国の株式会社。aksje ≡ 英 share, stock) になった。多数の株は政府がもっているが民間と競争しなければならなくなった。例えば、ベルゲンーヴォス間の鉄道は今は国営であるが、実験的に2007年からは国立の独立法人になる (政府の金は出なくなり、赤字はダメ)。地方の重要な企業の状況が悪くなくてもこの2、30年は政府は援助していない。劇場やオペラハウスは大きな公的援助を受けており、映画館はまだコマーネ立が多いが民営化されたものもある。

ここ20～25年の社会的な大傾向の一つは、問題の共同的解決から個人的解決への移行である。一人ひとりの自由の可能性が拡大し、連帯 *solidaritet* が減り競争が強くなっている。公的な政府の権威が減り、市場における解決になってきている。私立学校 (経費の85%が政府助成) の創立が容易になり、宗派的授業もより自由になった。同時に、個人化はクラスよりもっと小さな集団で、個人の能力、可能性によって調整される傾向になってきた。

②もう一つは知識への要求の増加と競争激化である。各生徒とノルウェーの社会が競争で勝たなければならない。*PISA*、*TIMSS*の結果が低かったので若者が競争に耐えるためには、基礎的知識を重視する。同時に個人個人に適応した教育を行う。教員のための高等教育入学には高校での数学とノルウェー語の成績の下限が定められた。

③三つ目には、社会変化、職業・職種の変化が激しく、生徒には融通性が求められ基礎知識が重要になり専門化は遅くなっている。具体的には学校で授業時間が増え、理論的科目が増えている。従来は高校職業教育コース2年間履修の後、1年間の理論学習をすれば

進学資格が取れたが、2006年8月から教育課程ではこの進路変更はより厳しくなる。9/11選挙後の政権与党は以前から理論学習の要求を緩めると言っていたがどうなるだろうか。

④子ども・若者はポスト・モダンになっており、個人として見られる、意見を聞いてもらえる、ユニークな個人として扱われることを期待している（個人化傾向）。「交渉する世代」というネーミングも行われている。一部に自己中心主義、エゴイズムの傾向もあるが、これは抑制に努めている。この2、3年は概ね自分の権利を要求するがそれ以上に権義務を良く果たす、相手の尊重、共同性・責任重視もする全体的に大変良い傾向になっている。

（2）当校の教育、生徒委員会

①ノルウェーと世界についての基礎知識・民主主義、その反対の独裁、文化交流能力の学習が重視され、進学する生徒のための歴史の学習が減っている。新「社会経済」科目 *Samfunnsøkonomi 1*、*Samfunnsøkonomi 2* の設置がその例である。9月11日の選挙で最大得票を得た労働党 Ap は、共同性を重視しており私立学校 *friskole* には反対でその増加傾向は止められるだろう。今度の政権与党（Ap、社会主義左党 SV、中央党 Sp）は、学校での理論の教授よりも学校の学習環境を良くすることを重視してきた。社会が複雑になってきて青年にとって社会の構造を理解するのが難しい。このような社会に出るために、政府は青年が社会に出て行く訓練と、そして責任を取ることを教えることを定めている。

責任をどのように訓練するか。生徒が学校にもっと参加し、授業計画に参加する、教員の授業を評価するようにする。特に当校では環境委員会 *miljøutvalg* に生徒が多数参加している。環境委員会は実際的な環境、社会的環境、精神的環境が良くなるよう目指している。

②教育法に拠って各高校には *elevråd* が置かれているが（注11）、通常15人の基礎グループを作っており、そこから1人の委員が選ばれて生徒委員会を構成する。

ヴォス・ギムナスでは、授業時間割で毎週最低1時限 *Studietime/Klassenstime*（今は月曜）という基礎グループの時間を設けていて授業の質など何か変えたいことがあればそこで議論し要求を出す。当県にしかない制度として *eleveinspektør* があり、生徒のために努め、生徒の権利を守る。生徒委員会は毎週、校長室で休み時間に会議をする。委員生徒は委員会出席のためその間の授業の欠席の権利がある。この会議には *styre*（学校管理教員5人）と *eleveinspektør* と学校施設管理人 *vaktmester* が集まって、問題があれば校長または施設管理人に要求する。生徒委員会用の予算が与えられていて委員会はそれを使うことができる。

Voss には当校の外に、農業、工作等、メディア・保健・福祉等、建築・電気・機械等の4高校があり、5校の生徒会委員長が会合している。会長は様々なイベントを企画する。

③当校は、音楽、体育両学科も含めて約70%の生徒が進学する。板書、グループ学習、プロジェクト中心、個人別学習等、様々な形態の授業をして大学、社会の要求に応じている。ノルウェー語の授業では発表、意見交流、評価をさせたりしている。前記と別に毎日

設けている *Studietime* を生徒は、数学補習や宿題その他、その週の特別サービスのために自由に使える。諸科目では1時限だけでなく2、3時限つづけて授業をする、各週の金曜日は1科目だけにするなど勉強の集中・能率向上を図っている。3年生の歴史授業では毎年、特別のテーマを選んでベルゲン大学教員に特別授業をしてもらっている。音楽科、体育科は定員が少なくて入学時から選ばれているが、問題は普通科にある。誰でも入ってくるので学習に興味がない生徒（特に男子）もいる。それをどのように勉強させるかには努力している。この前は中東問題について、またノルウェー100周年記念では2人の学者、前国会議員に講義をしてもらったが、それでも興味をもたない生徒もいる。当校では各グループに *kontakter* 教員を置き、この教員は一人ひとりの生徒と年に2回以上話し合う。また各科目の教員も科目の学習について会話を各学期に1回はすることとしている。

（3）教育課程改革

①教育内容が政治権力によって変えられるという伝統はノルウェーにはない。教育課程は政治家ではなく公務員が関与する。今の教育課程は非常に一般的な枠組みである。教育・研究省 *Utdannings- og forskningsdepartementet* (UFD) は幾つかの一般的な方針は出すが、実際にはUFDの下で教育管理庁 *Utdanningsdirektoratet* が設置する審議会で定められる。

②社会科の場合、その審議会には学者と関係科目教員代表たちが席を占める。今の若者は何を習う必要があるか、今の社会は若者に何を課題としているか、から議論を始める。

20年前の教育課程と比較すると、文化理解が重要になってきた。また世界はグローバリゼーションが強くなってきた。一般には、1) 社会の構造重視よりは過程重視、2) 寛容性重視になっている。3) 以前は知識を習得することが主だったが、今は分析と評価が入ってきており、4) 社会学的方法と思考を学ぶことが重視される。

③教育課程の総括的審議会は無い。この前も今回の教育課程改革も、高校職業教育課程を含めて、約450の各教科・科目の審議会が設けられた。各審議会毎に大体3、4人の委員がいる。その提案を *direktoratet* に送る。*direktoratet* がヒアリングに出す。ヒアリングを受ける機関は200~300。*direktoratet* がまとめてUFDに送る。ノルウェー語は第1学年~第4学年までで4人の審議会委員。「社会と経済」に関する高校1年の教科課程は、○地理、○歴史、○歴史と哲学（選択制）、○政治学と社会（選択制）となった。英語は第11学年までについて1つの審議会。

以上、校長の談話からは、同県内の高校・特に当校で、国、県の規制緩和・競争化の政治状況を超えて、生徒の自治、学校運営への参加、高校生、その代表・高校間の横の交流が行われている様子、様々な教育的創意工夫が持続・開発されている様子が理解できた。

(四) ヴォス中学校 *Voss Ungdomsskule*

9月13日午後、ヴォス中学校を訪問し教育担当副校長から説明を受けた。また、キリスト教、宗教及び人生観（KRL）科目の授業を見学し授業担当教諭から説明を聞いた（注12）。

(1) 副校長の説明

Kolbjørn Blikås 教育担当副校長 *undervisningsinspektør* の説明の要点は次のようであった。

①各学年6学級、生徒数約480、職員は校長、副校長のほか教員55、助手2、環境職員1。

②Voss コムーネに対しては、「活動計画」*Verksemdsplan* と「授業計画」*Pedagogisk Verksemdsplan* を提出している。

③現在では、16歳で職を見つけるのは難しく大体19歳まで高校に行くことが要求されている。理論的学習が要求されるが一部の生徒たちには動機づけが難しい。従来のノルウェーの状況では全ての学校が同じことをやってきた。そのため優秀な生徒にはチャレンジ *utfordring*（≒英 challenge）が少なく、弱い生徒にはそれに応じた「適応教育」*tilpasning*（≒ adaptation）が難しかった。当校は今、2週間の学習計画 *Arbeidplan* の課題として各科目毎に優秀な生徒と弱い生徒の両方に各課題を2つ又は3つ入れるよう努め、試みている。目標・課題として *SKAL*（共通最低目標）と *BØR*（出来たら更にする目標）を設けている。

「授業が早い」、「もう少し時間が必要」という生徒の言葉には気をつけている。

④家庭の経済的格差はあまり生徒の学習に関連していないが、*sosialeproblem heimen*（問題のある家庭）の影響は関連が強い。1人親家庭の生徒の学習意欲が比較的強く難しい、両親の関係が生徒の精神状況に及ぶ、家庭のきまりが明確でないなどの影響が考えられる。

この30年間の社会で大人の権威が減ってきた。また大人が忙しくしている。しかし10年前は「子どもは最低1時間半は勉強させて」と言っても親は聞きたがらなかったが、最近では良く聞いてくれる。親は学校がきまったきまりを明確にすることを求めている。

⑤ノルウェーでは職業学科は良く開発されている。親の背景が学問的なら進学学科、職業的なら職業学科への進路傾向があるが、前よりこれは弱まっていると思う。嫌々職業コースを選ぶことはまずあり得ない。不本意進路選択の生徒は殆ど無い。生徒は第10学年で高校訪問し、文書資料の提供、各高校からの教員による説明を受けている（親たちも）。

⑥Voss はかなり安定した地域で居住者の転出入は少ない。外国語を話す人も少なく異文化の問題も少ない。コムーネの人口は約1万4千のうち8～9千が中心部にあり、周りには競争がない。農業、牛・羊の飼育・酪農・肉製品産業が伝統的で農業機器生産工業もある。近年は観光業、交易・サービス業が増している。かつては兵営があったが無くなった。

(2) KRL 科目授業

Brit Valland 教諭の KRL 授業を約15分見学した。彼女は第10学年担当の学年指導教員 *Trinnleider* で KRL の外、ノルウェー語、英語を担当している。以下はその説明である。

①第10学年=中学3年生対象の授業で、大きな流れは、1. 哲学、2. 聖書、3. 宗教(仏教、ヒンズー教、イスラム)である。うち哲学では、キェルケゴールの外、ソクラテス、プラトン、アリストテレスを取り上げる。ソクラテスでは「対話」について話した。

②授業の当面のテーマは、「選択と価値、存在論と自然主義」で当該授業はキェルケゴールを扱った。哲学の中に宗教を入れることが難しい。大体の生徒が第9学年で堅信礼(式) *konfirmasjon* を受ける。それについて議論させようと努力している。

③このテーマの授業では、生徒が直面している問題(実存的問題、選択と決断)を考えさせる。麻薬の使用、性的関係、学校の宿題への取り組み、進学方向などを例にして、正しい人生、良い人生は何か、考えさせる。

④このクラスは話し好きで、教師の意見を聞くのも好き。英語もノルウェー語も担当し、生徒を3年間担当しているから生徒を熟知している。特に女子が授業後も話しかけてくる。最近の生徒は、自己中心的、ナルシストで成功が好き。美人であること、痩せていることなど社会の期待に応えようとしている。

倫理・宗教関係科目の教師に限られているのか判らないが、この国の教師は、若者が直面している様々な問題に直接答えるかどうかは別として、若者が彼らなりに答えを見つけるのを援助しようとしている。その際、実存主義的な考え方が底流にあると思われる。その感じは99年、2000年の訪問で得たのであるが、今回あらためてその感を深くした。

注

(注1) 本稿の資料源は、特記しない限り、研究調査訪問先の当事者の説明及び提供資料による。なお、資料源として示す URL の後には、その確認年月日を付す。ニッテダル中学校の学級、職員資料源：<http://www.nus.skole.as/2006.8.18>。同コミュニティー資料源：<http://www.nittedalsporten.no/kommune.html>、2006.8.19。

(注2) *Lover* は *lav* (=英 *law*) の複数未知形(英語の複数形に不定冠詞の着いた形に相当)。以下、*Regeler* は *regel* (=英 *rule*) の、*Normer* は *norm* の複数未知形。

(注3) ノルウェーの公立学校では、一般教員は学校毎にその意思決定機関が任用するのが通例である。しかし、*rektor*、*inspektør* 等、特別の職は各自治体において職種毎に定められているようである。1999年9月に訪問したウストフォル県 *Østfold fylkeskommune* の例では、高校長 *rektor* は県執行委員会(=県の最高執行機関)、副校長・教頭又は主任に類する *inspektør* は県行政委員会、一般教員は各校の学校委員会 *skoleutvalget* が採用していた。*Nittedal* 中学校については未確認。また、同校に他の職務の *inspektør* は存在していない。

(注4) 県と県の政治・行政全般の概要は、次のようである。1) ホルダランド県 *Hordaland fylkeskommune* は

ノルウェーの南西部沿海部に在る。同国の19の県の中で人口は3番目に大きく約45万人で、人口が集中しつつある。県内には最長のフィヨルドがあり世界的観光地でもある。県庁及び国の代表機関の所在都市 *Bergen* は古くハンザ同盟の交易・漁業都市であり、人口23万5千で国の第2の都市である。2) 2003秋～2007年秋の県議会 *fylkestinget* : 総員57議員の構成は、労働党 *Arbeiderpartiet* 13、進歩党 *Fremskrittspartiet* 13、保守党 *Høgre* 11、社会主義左党 *Sosialistisk Venstreparti* 6、キリスト教民主党 *Kristeleg Folkeparti* 5、中央党 *Senterpartiet* 4、自由党 *Venstre* 2、赤色同盟 *Raud Valallianse* 2、年金党 *Pensjonistpartiet* 1、である。進歩党、保守党、キリスト教民主党の3党が県政与党であり、県議会議長(県執政の最高責任者)はキリスト教民主党、副議長は保守党である。以上の資料源 : <http://www.hordaland.no/> (2006.8.22現在)。3) 同県では実験的に *Bergen-Voss* 間の国鉄を独立国立法人にしており、民営委託化検討中等、規制緩和・グローバル競争経済導入が試みられている。4) 国では2005年秋まで伝統的右派の保守党と中道的なキリスト教民主党及び自由党が中道・右派連立政権を組み、規制緩和・競争主義政策の最右翼である進歩党は政権外にあった。しかし、ホルダランド県では進歩党が県政権に与しており、自由党が県政権外にあり、一般行政では規制緩和・競争政策がかなり浸透しているのが特徴的と思われた。

(注5) 資料源 : 前注4の <http://www.hordaland.no/> に同じ。

(注6) 国の教育課程改革は <http://odin.dep.no/kd/norsk/tema/kunnskapsloeffet/>、参照。

(注7) *kompetanseutviklingsprogrammet* (国会への政府報告1997-98年度42号) に基づく。

(注8) しかし、2005年9月11日の国会選挙後、政権は右派・中道連立から左派・中道連立に移行した。

(注9) この提訴と KRL に関連する「教育法」の改正は、本誌6号・北川「ノルウェーの初等・中等学校における宗教・倫理及び社会科教育——アイツォグ教授談話とその関連事項」10-12頁、参照。

(注10) 同校の現状詳細は <http://vog.hfk.no/templates/SchoolFrontpage.aspx?id=2247>。なお、*gymnas* はドイツのギムナジウムに相当する中等学校を指す語。

(注11) 「基礎学校および後期中等教育に関する法律」(1998年法律第61号)によって、ノルウェーの高校には生徒委員会 *elevråd* (北川は従来「生徒評議会」と訳してきたが、「委員会」のほうが判り易いのでこの際改める。)の設置が定められている。生徒委員会から選出される生徒代表2名は、教職員代表および県代表と共に当該校の最高諮問機関(実際には多くの県で最高意思決定機関)である「学校委員会」の構成員を成し (§11-5)、生徒委員会の委員生徒は生徒20人に1人以上の割合で選ばれる (§11-6)。また、県全体の高校生および見習い実習生の代表は、県の委員会 *nemnder* に出席し発言する権利を有する (§11-8)。なお、同法においては、基礎学校でも、児童・生徒およびその父母の代表による児童・生徒委員会および父母委員会、並びにその委員会代表が学校の最高諮問機関(コムーネによっては最高意思決定機関)である協同委員会への参加が定められている (§11-1~§11-4、§11-9)。

(注12) なお、同校については、<http://www.vestweb.net/vossungdomsskule/>、参照 (2006.8.22)。

本稿は、2003-05年度科研費「ノルウェーの社会科、宗教・道徳教育及び生活指導に関する比較教育学的調査研究」(課題番号:15530524)による調査研究旅行に基づく。

——2006年11月11日——

キーワード : ノルウェー 教育 社会科 宗教・倫理 生活指導

Keywords : Norway, education, social studies, religion/ethics, student guidance